

## 保育現場における図鑑・科学絵本の活用実態に関する研究

仲本 美央

### 研究実績の概要

日本の保育現場では、子どもの成長・発達を支える児童文化財の一つとして絵本や児童書をはじめとした本を活用することが多い。国内外の数多くの研究者が保育現場における絵本や児童書の活用に着目し、その効果に関する研究が取り組まれてはいるものの、本の内容や分類ごとの活用方法やその効果に関する研究の取り組みは乏しい。特に、図鑑・科学絵本の活用に関する研究については、中川ら(2014)の絵本を通じた幼児期の科学教育実践の研究報告はあるものの一例の実践報告に留まっており、全体的な保育現場の実態把握や傾向は明確にされていない。また、指針・要領の改訂に伴い、幼児期までの教育では科学の経験を重要視する現場は多く、公益財団法人ソニー教育財団では、幼児教育支援プログラムにおいて「科学する心を育てる実践」を表彰している現状がある。このような実践を行う上で、図鑑や科学絵本は子どもの探究心を育む上で大切なツールの一つであるため、その活用方法やその効果に関する研究は子どもの育ちを支える一助となると考える。

しかしながら、現在、保育学分野における図鑑・科学絵本に関する研究においては、先述した通り本の内容や分類毎の活用方法やその効果に関する研究だけでなく、保育現場において全体の蔵書数に対してどのくらいの割合で図鑑・科学絵本を蔵書しているのか、その具体的な実態調査も乏しい。さらに、保育者が保育現場の物的環境の一つとして図鑑・科学絵本に対してどのようなニーズがあるのかについても捉えられていない。このことから幼児期までの教育では科学の経験を重要視する現場が多くなっているに関わらず、この分野の研究が発展途上であると言える。

本研究では、保育現場における図鑑・科学絵本の活用実態に関するアンケートならびにインタビュー調査を行い、保育者が子どもの科学的な経験をどのように捉え、計画・実践し、子どもの成長・発達を支えているのかを把握することで図鑑・科学絵本の効果的な活用方法を明らかにすることを目的としている。

3年間の計画のうち、1年目となる2020年度はコロナの影響に伴い、保育現場が日常に戻りつつある頃までアンケート調査開始を控えたことにより、遅れがあった。しかしながら、初秋頃より保育現場の団体への問い合わせを図り、各地域状況を把握した上で協力依頼を行った。2021年11月頃から同意を得られた地域の保育現場より順次アンケート調査依頼をした。その結果、2021年4月までの間に全国1023園の保育現場(公私立ならびに企業立などの保育所・幼稚園・こども園)へ調査用紙を配布し、516園(回収率50.4%)より回答が得られた。これらの回答のうち、未記入など欠損項目があったものを除いた487園を分析対象としてExcelを用いた単純集計を実施した。その結果、①絵本・本の蔵書数については、約8割の保育現場が300冊以上であると回答していた ②図鑑の蔵書数については、5割以上の保育現場が30冊以上であると回答していた ③幼稚園は図鑑の蔵書数が多い傾向にあり、幼稚園全体の約4割程度が50冊以上であると回答していた ④図鑑の設置場所については、幼稚園と認定こども園の半数程度が絵本室や絵本ルームと称した図書室に設置している ⑤科学絵本の蔵書数については、保育所の8割弱程度が30冊以下であると回答し、幼稚園の5割弱程度が30冊以上であると回答し、傾向が異なっていた ⑥図鑑と科学絵本の活用者については、主な

活用的是子どもと担任保育者であったものの、全体の1割程度であったが保護者も活用しているなどが明らかになった。2年目となる現在、これらのデータについてより詳細な統計的分析を行い、考察していく予定である。